ウジェーヌ・ミンコフスキーの時間論における空間と時間の連帯性について

佐藤　愛

ミンコフスキーが『生きられる時間』において示そうとした時間論とは、どのようなものだったのだろうか。ミンコフスキーの時間論は、一見するとそのタイトルから、生き生きと経験される時間を空間化された時間に対置し、前者の重要性を描こうとしたものであるように見える。しかし、ミンコフスキーが『生きられる時間』において示そうとしたのは、そのような生き生きとしたものへの手放しの賞賛や空間化された時間との対立図式ではなく、時間的、すなわちミンコフスキーの言葉で言い換えれば、非合理的なものと、空間的、すなわち観念的に定式化されたもののあいだに、ある関係性が存在し、両者が分かちがたく結ばれている点である。

本論文では、このような『生きられる時間』の主題について、その第一章の議論を追いながら明らかにすることを目指す。したがって、まずわれわれは、ミンコフスキーがその時間論を展開するにあたって、当時対峙しようとした時間論のある立場について示す。次いで、空間化された時間を一度は拒否しながらも、それが時間の「本来の姿」でないことを確認した後にこれを「必要不可欠なもの」とみなす、ミンコフスキーの論理展開を確認する。これによって、ミンコフスキーが『生きられる時間』において明らかにしようとした時間論の主題が、「空間と時間の連帯性」にある点を示す。

1．「伝統的心理学」批判

1－1　伝統的心理学者とは誰か

ミンコフスキーの時間論の独自性を考察するために、まずは、彼が、当時のどのような思想を批判し、自身の論をどのような立場に位置づけようとしたのかを確認しなければならないだろう。ミンコフスキーは、『生きられる時間』において展開される自身の時間論が、「伝統的心理学とは意見を異にする」[1]ことを明言しながら、次のように述べる。

伝統的心理学は、感覚、知覚そして表象を出発点にするから、時間に関する

> 現象が問題になると、まず記憶のことを考える。そこで未来は、われわれの前に投影された過去のイマージュとしてしか考察されず、未来に入り込む第一の行為は予見だということになるだろう。この条件の下では、理想は一切を予見（*prévision*）することだろう[2]。

ここでミンコフスキーは「伝統的心理学」について、これが「感覚」、「知覚」、「表象」を出発点にしながら時間論を展開する点を批判する。「伝統的心理学」は、時間を、過去の記憶からしか考えず、ここにおいては未来もまた、過去との関係性においてしか語ることができない。ミンコフスキーは、未来を、予見可能なものであるとは考えない。未来は未知であり、これについてわれわれが思いを巡らすことは、決して「過去のイマージュ」を意識に思い起こすことには還元されないのである。

このように、ミンコフスキーは自らの時間論を練る過程において、自身が「伝統的心理学」と呼ぶところのものを論駁しようとする。この「感覚」、「知覚」、「表象」を出発点とする「伝統的心理学」とはどのようなものなのだろうか。ミンコフスキーはこの「伝統的心理学」について、具体的な人物の名を挙げて批判しようとはしない。しかし、第一章の別の箇所においてミンコフスキーは、ある人物を名指ししながら、瞬間の継起について論じている。そこでわれわれは、この箇所におけるこの人物へのミンコフスキーの批判を引用し、「伝統的心理学」批判において念頭におかれている人物を明らかにしたい。ミンコフスキーは、次のように述べている。

> わたしがツィーエンの書物の一つにおける時間の記述によって与えられた印象は、次のようなものだった。「われわれは決して停止する場所（ポウ・ストゥ）を見出さないだろう。われわれはわれわれの表象と感覚によって運ばれる。われわれはそれらを停めることができないし、われわれを乗せて前方へ疾走する戦車から飛び降りて、観客としそれを眺めることもできない。われわれの表象に関する思惟の各々は、すでに新しい一つの表象である。瞬間Aをつかんだと思うや否や、われわれはすでに瞬間Bの餌食である。」この記述を読むとき、ひとはほとんど叫びをあげたい欲求を感じる[3]。

この引用において「ほとんど叫びをあげたい」ほどに、ミンコフスキーに対し、目まぐるしく継起する各瞬間についての印象を与えたツィーエンの書物とは、どのようなものだったのだろうか。また、そこにおいて描かれ、ミンコフスキーが批判す

る「表象」や「感覚」によって構成される時間論とはどのようなものだったのだろうか。

1－2　ツィーエンの心理学

ミンコフスキーは、上の引用において、心理学者テオドール・ツィーエンを名指しで批判する。ツィーエンは1862年に生まれ、1950年に没したドイツの心理学者である。彼は心理学のなかでもヴントに端を発する生理学的心理学の立場に身を置くが、同時に、連合主義心理学的傾向を持つ。このようなツィーエンの立場と、上述のミンコフスキーの引用における「表象」や「感覚」といった言葉の意味するところを分析するために、まずは1891年に刊行されたツィーエンの『生理学的心理学への指針』を見てみよう。

ツィーエンはまず「感覚」について、次のように述べている。

> 外的刺激E（刺激物）は、これとともにわれわれが出発すべきものであるが、純粋に生理学的な要素である。感覚神経への刺激によって、この外的刺激は神経－刺激となる。この神経－刺激はもうひとつの生理学的過程であり、適切に物理的もしくは化学的ともみなされ得る。この刺激の生理学的過程は、求心的神経回路に沿って中枢に向けて伝えられる。そして、大脳皮質においてS（感覚）から刺激を製造する。最初の精神的要素は、感覚であるが、これはこの大脳刺激に相当するのであり、したがって、生理学的心理学の主な役割は、感覚の理論を扱うことにある[4]。

上の引用でツィーエンはまず、「生理学的心理学」の主要な役割が「感覚の理論」を扱うことであることを明言する。そして、ここで言う「感覚」とは、彼の論理に従えば、われわれにおける「最初の精神的要素」であり、「大脳刺激」に相当する。したがって、「生理学的心理学」において言われるわれわれの「感覚」とは、あくまでも「物理的」もしくは「化学的」な「刺激」に還元されるものであるということが明らかとなる。このように、ツィーエンは「感覚」を純粋に物理的なものに帰するが、同時に、これについての理論を論じることこそが、「生理学的心理学」の役割であるとするのである。

次に、ツィーエンへの批判において、ミンコフスキーが「表象」と呼ぶところのものについて確認したい。ツィーエンは、次のように述べている。

> 皮膚刺激は感覚Sに相当する。以前の皮膚刺激の残留は心的イメージもしく

> は観念と呼ばれる。これが I である。自然淘汰によって、この脳のメカニズムは、以前の刺激が最も複雑な方法によって利用され得るほどに発達してきた[5]。

このようにツィーエンは、時間的に前の「刺激の残留」を、「心的イメージ」もしくは「観念」と呼ぶ。これが、ミンコフスキーが「表象」と呼ぶところのものであると考えられる。ツィーエンは、「刺激」、すなわち「感覚」が物理的に神経に残存することによって「心的イメージ」、もしくは「観念」がわれわれに引き起こされると考えるのであり、したがって、ミンコフスキーが「表象」と呼ぶものもまた、上にみた「感覚」と同様に、純粋に物質に還元されるものである[6]。

しかし、ミンコフスキーがツィーエンの「生理学的心理学」を批判するのは、このように「感覚」や「表象」が純粋に物理的・化学的なものとされるからではない。では、ミンコフスキーはツィーエンの心理学の何に反論したのだろうか。上述のミンコフスキーの引用に戻ろう。

1－3　停止する点

ミンコフスキーは、上の引用に続けて次のように述べている。

> この記述を読むとき、ひとはほとんど叫びをあげたい欲求を感じる。「しかしそれは全部間違っている。停止する点は存在する。われわれは皆それを知っている。存在の各瞬間毎に、われわれは観客になることができる。われわれの使命はそこにあるくらいである。それはわれわれが生において果たすべき本質的な企ての一つである。」[7]

ここでミンコフスキーは、ツィーエンによる「感覚」と「表象」の目まぐるしい時間論に反論する。上で確認したように、ツィーエンは、「心的イメージ」や「観念」を時間的に前の「刺激」、すなわち「感覚」の「残留物」ととらえていた。したがって、ツィーエンに従えば、記憶の経過は前の刺激の残留から説明されることになり、時間は感覚の残留の堆積物でしかない。これをミンコフスキーは、「われわれの表象に関する思惟の各々は、すでに新しい一つの表象である」として、批判するのである。このようなツィーエンの時間論においては、時間の流れは、「感覚」とそれについての「表象」が生じては消えていくという各瞬間の繰り返しでしかなく、われわれは永久に新たな「感覚」、すなわち「刺激」を受容し続けることでしか時間を生きられない。しかし、ミンコフスキーのこのようなツィーエンの時間論に対し、「われ

われは、ツィーエンがそれを望むように、時間をもっぱらわれわれの意識の多様な要素の間断なき継起としてのみ生きる、ということがあり得ない」[8]として、異を唱える。ミンコフスキーに従えば、われわれは、「感覚」とそれについての「表象」の連鎖から時間を生きるのではなく、存在の各瞬間毎に「停止する点」に立ってそれを静かに眺めることができる。むしろミンコフスキーは、そうして静かにわれわれの生を眺め、観想することこそが、われわれの生において果たすべき「本質的な企て」であるとすら言うのである。

この点についてさらに詳しく確認するために、ミンコフスキーの『生きられる時間』第一章の引用を続けたい。ミンコフスキーは、次のように述べている。

> 非常にしばしば、われわれは、各瞬間毎に、絶え間なく、常に、外界や内的生命の出来事に関する新しいイマージュを眼前に形成しながら、時間の現象が、一種の万華鏡（カレイドスコープ）に変えられたのを見る。このようにして、渦動、自失する疾走、絶え間ない継起の観念が生に取って代わる。これはわれわれの持つ反省と省察の必要に対して、ごく僅かでも安定した、どんな支点も与えない[9]。

このように、ミンコフスキーは、目まぐるしく継起する各瞬間から時間について論じることを、拒否する。これはツィーエンの時間論に対する批判であり、このようなものとして時間をみなすことを、ミンコフスキーは、時間が「万華鏡」に変えられてしまった状態であるとする。ミンコフスキーは時間が「万華鏡」のように絶え間なく定まらないものではなく、安定した支点、すなわち「停止する点」を持つものであると考えるのである。

この点に関して、ミンコフスキーは次のように述べている。

> 空間と同一視された時間は、周知のごとく、行き過ぎた静力学主義（スタチスム）のために間違っている。しかし、反対に、行き過ぎた動力学主義（ディナミスム）によって誤ると思われるところの時間のイマージュに対しても、それ以上にではなくとも、同じように警戒しなければならない[10]。

ここでミンコフスキーは、「空間と同一視された時間」が、「行き過ぎた静力学主義（スタチスム）」のために誤っていることを確認しながら、だからといって、「行き過ぎた動力学主義（ディナミスム）」に陥ることもまた、同様に退ける。すなわちミンコフスキーは、空間化された時間と、目まぐるしく変化する「万華鏡」のような時間について、どちらも同様に警戒すべきであるとして、注意を促すのである。

これまでわれわれは、ミンコフスキーが「伝統的心理学」、すなわちツィーエンを代表とした「生理学的心理学」を、時間論の視点から批判していたことを見てきた。ツィーエンの「生理学的心理学」においては、時間は「感覚」とその残留物である「表象」の目まぐるしい連鎖に還元されてしまう。ミンコフスキーが拒絶しようとしたのは、「行き過ぎた静力学主義（スタチスム）」に属する「空間化された時間」であるが、これとともに、「生理学的心理学」が展開してきた、「感覚」と「表象」が織り成す「万華鏡」的時間としての「行き過ぎた動力学主義（ディナミスム）」もまた退けられることが明らかとなった。

しかし、一方でミンコフスキーは、これら「空間化された時間」と、「万華鏡」的時間を、ともに擁護しようとする。これはどういうことだろうか。以下ではこの点について、「空間と時間の連帯性」という観点から考察していく。

2．空間と時間の連帯性

2－1　万華鏡的時間

ミンコフスキーは、「万華鏡」的時間について、次のように述べる。

> われわれは万華鏡（カレイドスコープ）のイマージュを退けた。しかしながら、このイマージュはそれを描いた者の精神の内に生じることができたのである。確かにそれは、本当の時間ではないだろうが、しかしそれにも関わらず、おそらく時間の一つの様相なのである。いまやわたしは事実、継起の観念から出発して、問題の万華鏡をわたしの内に再構成することを認めるだろうか。然り。この万華鏡を単に表象するばかりでなく、さらにそれをはるかに生々しく体験することさえも、しばしばわたしに起こるのである[11]。

ここでミンコフスキーは、自らが一端退けた「万華鏡」のイマージュについて、留保を付け加えようとする。ミンコフスキーは、「万華鏡」的な時間について、これが「本当の時間」ではないにしても、「時間の一つの様相」であることを認めるのである。ミンコフスキーによれば、「万華鏡」のイマージュは、われわれのなかに、単に「表象」として思い描かれるだけでなく、「生々しい体験」として生起する。

さらにミンコフスキーは、続けて次のように述べる。

> 疲労、失望、落胆のとき、すべてが束の間の、儚い、つかみどころのないものに思われる。生が、わたし自身の生も、わたしの周りに流れる生も、現実に時間とともに逃げて行き、わたしはそこに足を踏まえることができないように思われる。そして「それが何になる」という破滅的な態度がわたしの存在全体を支配する。それらは一時的な瞬間でしかなく、またそうあることをわたしも望むが、しかしながら、このような瞬間は存在するのだし、時間の特殊な様相を表現しているのである。またもし、これらの瞬間やより合理的な万華鏡のイマージュは、時間の構造を完全に充実した本来の姿において浮き彫りにするための、比較項としてのみ役立てられるべきであるとしても、それらが時間とどんな関係をも持たないとしたならば、それらはその役割を決して成しえないだろう[12]。

ミンコフスキーは、ここで、「万華鏡」的な時間以外の、「本来の姿」ではないのだが、あり得る時間の特殊な様相の例として、「疲労」、「失望」、「落胆」をあげる。これらのとき、時間が「束の間の、儚い、つかみどころのないもの」に思われると同時に、われわれ自身の生やわれわれの周りに流れる生が、「時間とともに逃げて行き、わたしはそこに足を踏まえることができない」ものとして経験される。したがってミンコフスキーに従えば、時間の様相と、われわれの生の在り方は、軌を一にしていることになるだろう。

しかしここで重要なのは、このような「疲労」、「失望」、「落胆」の時間と、「万華鏡」的な時間が、どちらも「存在する」という点である。これらは、「時間の構造」を「完全に充実した本来の姿」のなかでとらえるための比較項であるべきであるにせよ、これが比較項となるためには、結局は時間の本来的な姿と何らかの関係によって結ばれていることを意味している。すなわち、非本来的な時間と本来の時間は、全く別々のものではなく、一続きのものである。

さらにミンコフスキーは、次のように述べる。

> 時間の内的本性に入り込もうとするすべての研究において、背景に空間の観念が、無言（muet）の、しかし不可欠の端役として現れるのをわれわれは見る[13]。

前節においてわれわれは、ミンコフスキーが「空間化された時間」を「行き過ぎた静力学主義（スタチスム）」であるとして退けるとともに、「万華鏡」的時間が「行き過ぎた動力学主義（ディナミスム）」であるとして拒否されることを確認した。しかし、続いてミンコフスキーは、上に見たように、「疲労」、「失望」、「落胆」の時間や「万華鏡」的な時間という非本来的な時間が、確かに「時間の一つの様相」であるという点を認める。そしてさらに、ここでミンコフスキーは、「空間化された時間」、「万華鏡」的時間、「疲労」、「失望」、「落胆」の時間といった非本来的な時間をひとまとめのものとして扱い、これらの中に、あらゆる「時間の内的本性」を論じようとする研究において、「背景に空間の観念が、無言の、しかし不可欠の端役として現れる」様子を見るのである。

このように、ミンコフスキーは、「空間化された時間」や「万華鏡」的時間に代表される時間の本来的でない様相を、一端は否定したものの、完全に排斥することはしない。むしろ、これらが本来の姿でないことを確認した後においては、このような非本来的時間は、時間の構造を考察するためには必要不可欠のものであり、時間の「本来の姿」とは切り離せない関係を取り結ぶものであるとみなされる。したがって、ミンコフスキーが述べるように「空間化された時間」（に代表される非本来的時間）と時間の「本来の姿」、空間と時間は、「連帯性（*solidalité*）」を携えたものとしてある。

２－２　活動の枠

ここで、再びミンコフスキーによる「伝統的心理学」批判に戻ろう。ミンコフスキーは、われわれが一番初めに引用した「伝統的心理学」批判の直前に、次のように述べていた。

> 確かに、われわれの言って来たことは、普通のものの見方に反するであろう。普通のものの見方は、常に具体的な関係から出発する。しかしそれは正しいだろうか。普通ひとが「一般的で抽象的」であるところのものが、いわゆる具体的なものよりも、はるかに基礎的で身近なものであることが、はなはだ

> 多いのである。前者が後者の存在理由なのではないだろうか。前者が後者をわれわれに了解させてくれるのではないだろうか。われわれが伝統的心理学と意見を異にするのは、この点についてだけではない[14]。

ミンコフスキーは、「普通のものの見方」が「常に具体的な関係」から出発することに反論する。ここでいう「普通のものの見方」とは、「伝統的心理学」の視点であり、これに続いて、上に見たように、「伝統的心理学」が「感覚」、「知覚」、「表象」から出発する点が批判されることになる。したがってここでミンコフスキーは、「伝統的心理学」が「具体的な関係」から思考を開始することに対し、反論していることになるだろう。ミンコフスキーは、「一般的で抽象的」なもののほうが、「具体的」なものよりも「はるかに基礎的で身近のもの」であることが多いとし、「一般的で抽象的」なものが「具体的」なものの「存在理由なのではないか」とすら述べるのである。

ミンコフスキーはなぜ、このようなことを述べるのだろうか。さらにミンコフスキーの言葉を、この引用に遡って引用したい。

> それ〔生の躍動〕はすべての特殊な活動に不可欠の形式（forme）、すなわち枠（cadre）、それなしではそのような活動が決して生じ得ないであろうところの雰囲気（atmosphère）を創造する[15]。

ここでミンコフスキーは、すべての特殊な活動には不可欠な「形式」、「枠」、すなわち「雰囲気」があると述べる。したがってミンコフスキーは、個々の活動、すなわち「具体的なもの」が生じるためには、「形式」すなわち「一般的で抽象的」な枠組みがまず必要となるのであり、「存在理由」であるところのこの枠なしには、個々の具体的な活動は存在し得ないと考えるのである。

この点に関し、ミンコフスキーは次のような例をあげる。

> ひとつの仕事を明日の5時までに終えたいと望むのと、生の躍動において未来が自分の前に広々と開けるのを見るのとでは、二つの全く違った互いに無限に隔たった事柄である。これについては強調する必要もあるまい。生の躍動は、決してなんらかの意欲や、ある明確な目的に赴く傾向や、時間の内に次々と現れるそのような意欲や目的の合計に、還元されるものではない[16]。

このようにミンコフスキーは、「ひとつの仕事を明日の5時までに終えたいと望む」

というひとつの具体的な活動と、「生の躍動」が創造する活動に不可欠な「枠」について、これらが「無限に隔たった」、全く異なるものであることを強調する。「生の躍動」が想像する活動の「形式」は、「なんらかの意欲や、ある明確な目的に赴く傾向や、時間の内に次々と現れるそのような意欲や目的の合計」といった、「具体的なもの」には決して帰し得ない。われわれは抽象的な「形式」と具体的な「活動」を同時に必要とするのであり、後者のみを重視する「生理学的心理学」の立場も、前者のみを重視する「空間化」され過ぎた思考の立場も、同じく拒否されなければならないのである。

3．おわりに

われわれはここまで、まず、ミンコフスキーが自らの時間論を、ツィーエンを代表とする「生理学的心理学」に対峙するものとして構成したのを見た。次に、『生きられる時間』において展開される時間論が、生き生きとしたもの、すなわち時間的なものと、抽象的で死んだもの、すなわち空間的なものを、同時に不可欠な構成要素と見なす点について確認してきた。ミンコフスキーは、一見すると生き生きとしたものを重視するように見えるが、むしろ、抽象的なものをこそ重視するような言葉すら述べていた。ミンコフスキーは、「生理学的心理学」を、目まぐるしい継起から時間を論じるものであり、これを「空間化された時間」であるとして批判する一方で、これが常に「具体的なもの」から出発することを批判する。ここには、過度に経験を重視し過ぎれば、この経験が「具体的なもの」への「意欲や目的の合計」といったものに還元され、結局は生き生きとしたものを取り逃がしてしまうミンコフスキーの立場が読み取れる。

したがって、われわれが常に「具体的な」経験と「一般的で抽象的な」形式の両方から、すなわち「空間と時間の連帯性」から出発しなければならない。この点に関し、ミンコフスキーは次のように述べる。

> 一方においては、時間は一切の概念的定式化に逆らう非合理的な一現象として現れるが、しかし他方において、われわれがそれを表象しようとするやいなや、それは自然に一本の直線の様相を取る。したがって時間のこれら二つの極端な様相の間に挿入され、梯形に配置される（s'échelonner）、一方から他方への移行を可能にするような諸現象が存在するのでなければならない[17]。

このように、時間は一切の「概念的定式化」に逆らいながらも、その一方で「自然に一本の直線の様相」と化すことを受け入れる。したがって、時間について思考することそのものが、時間と空間の連帯性の現れを示している言えるだろう。われわれは、このようなミンコフスキーの時間論への示唆に従って、続けて彼の時間論を考察しなければならない。

---

[1] Eugène Minkowski, *Le temps vécu : Études phénoménologiques et psychopathologiques*, Paris, PUF, 2005, p. 36.（以下、引用の際にはTVと略記し、その後に当該ページ数を記すこととする。）
[2] TV, 36.
[3] TV, 14. この引用内にある括弧は、ミンコフスキーがかつて、自身の初期の論文「心身並行説の原理における接続についての研究」（Eugène Minkowski, "Betrachtungen im Anschluss an das Prinzip des psychophysischen Parallelismus", in Archiv für die gesamte Psychologie, t. XXXI, 1914.）において、同様の内容をすでに述べたことを意味している。ミンコフスキーがこの初期の論文を書いたのは1914年であるが、これは、この論文がミンコフスキーが執筆活動を始めた最初の三年間における作品であることを意味する。したがって、研究活動の初期から『生きられる時間』が刊行される1930年に至る26年間のあいだ、大戦による中断を受けながらも、ミンコフスキーは、彼が「伝統的心理学」と呼ぶところのある時間論への拒絶を、自らの中に保持し続けたことになる。
[4] Theodor Ziehen, translated by C. C. Van Liew and Otto Beyer, *Introduction to physiological psychology*, London, Sonnenschein, 1892, p. 21-22.
[5] *Ibid.*, p. 23.
[6] ここでツィーエンが「自然淘汰」によって「脳の刺激物」が「最も複雑な方法」で利用されるようになったとするのが、記憶のメカニズムであると考えられるが、この点については別稿において考察する。
[7] TV, 14.
[8] TV, 14-15.
[9] TV, 14.
[10] TV, 14.
[11] TV, 20.
[12] TV, 20.
[13] TV, 20.
[14] TV, 36.
[15] TV, 35.
[16] TV, 35.
[17] TV, 22.

La solidarité spatio-temporelle chez Eugène Minkowski

Ai SATO

Dans son étude du temps, *Le temps vécu*, Eugène Minkowski propose « la solidarité spatio-temporelle ». Comment cette conception y joue ? Dans notre article, nous considérons que elle y unit les choses vécues à les abstraites. Contrairement au titre de son étude, *Le temps vécu*, Minkowski montre non seulement l'importance des choses vécues mais aussi la nécessité des chose abstraites. Pour Minkowski, c'est la pensée du temps même qui manifeste l'union spatio-temporelle.